
Narcotic Addiction

田中伊織

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Narcotic Addiction

【Zコード】

Z9852C

【作者名】

田中伊織

【あらすじ】

平凡で、何の取り柄もない江藤秋彦。幼なじみの森田優子とともに第一志望の学園に入学した彼は、そこで出会った宇佐美賢人に強引に剣道部に連れていかれる。平凡な生活を予想していた秋彦だが、そこから物語は動きだして。。。

第一話 出会いの季節（前書き）

執筆後に気付いたのですが、秀明学園とこいつが前の学校は実在します。が、本作品はフィクションであり、当然何の関係もありませんので御了承ください。

第一話 出会いの季節

「宇佐美賢人君」

初めて聞く名前が呼ばれ、前の席に座っていた人が教室の前へと歩いていく。

校門から続く満開の桜並木。

伝統ある旧校舎と、最新設備の整った綺麗な新校舎。

小高い丘の上に建つ、第一志望の学校。

今日から俺は、この学校の一員になった。

4月6日、秀明学園高等部入学式。

教室の前に出た宇佐美君という人物は、人気のお笑い芸人の芸風で自己紹介をした。

教室中がどつと沸く。

彼は緊張という言葉とは無縁なのだろう。

俺は、彼が羨ましくなった。

宇佐美君が席に戻る。

次だ……

鼓動が早くなつていく。

たかだか40人程度のクラスメートに自己紹介をするだけなのに、こんなにも緊張してしまつ自分が嫌になる。

「江藤秋彦君」

俺の名前が呼ばれた。

俺は緊張を悟られないようにゆっくりした動作で立ち上がり、余裕ある風を装つて前へと歩いていく。

「江藤秋彦です。よろしくおねがいします」

それだけを言って席に戻る。

宇佐美君以外の人があつたのとほぼ同じ内容の自己紹介。
印象に残るはずがない。

俺は、どちらかというと眞面目で、人見知りで、目立たないほう。

成績そこそこ、運動神経は人並み、身長は低いほうだし、顔がいいわけでも特技を持っているわけでもない。つまりは、平凡な一生徒なのだ。

だから、当然高校生活も平凡なものになると思っていた。が、その予想はあつという間に崩れ去ることになる。このときの俺にそんなことがわかるはずもなくて。運命の足音は、すぐそこまで迫つて来ていたんだ……

「アツキー」

呼ばれて振り返る。

そこには見知った顔があった。

「……何？」

「あー、なんか冷たい」

森田優子。

家が隣で、物心つく前からの付き合いだ。

人見知りをする俺にとつては気兼ねなく話せる数少ない友人であり、彼女と同じクラスになったことは幸運だったといえるだろう。「せつかく友達の少ないアツキーがヒマしてるだろーなーって思つて、可愛くて優しい優子さんが話しかけてあげたのに」

「ははは、冗談は顔だけしてくれ」

「ああ、超失礼なこと言つてるし！」

軽口を言つて笑い合う。

いつもと変わらない光景だつた。

「お、もしかして彼女？」

突然前の席から声がかけられた。

「いやー、お熱いこつて。愛のチカラで受験を乗り越えたつてやつか？」

「べ、別にそんなんじゃないわよつ！つていうか、人の会話を立ち

聞きなんて、いい趣味してるじゃない」

「立ち聞きじやない、座り聞きだつ！」

「ああ、超失礼なこと言つてるし！」

確かに、座つてはいるな。席が俺の前だし。

「そ、そういうことじゃなくてっ……」

「まあまあ、カタイコト言になさんなつて。俺、宇佐美賢人、よろしくなつ！」

そう言つて右手を差し出す。

やたらと爽やかだ。

「あ、ああ、俺は……」「

「秋彦君だつけ？ 確か」

差し出された右手を握りながら名乗ろうとしたところで、先に言われる。

「どうか、苗字ならともかく、名前のほうを覚えていたとは。

「覚えてくれたんだ。そう、江藤秋彦」

「席が前後のヤツくらいは覚えるだろ？」

「ふーん、じゃあ私の名前は覚えてないと？」

優子がいたずらっぽく笑いながら言つ。

だが、宇佐美君は笑顔で返した。

「優子ちゃんだろ？」

「えつ？」

二人同時に驚く。

「ふつふつふ、俺を甘く見るなよ？ このクラスのみならず、学園中の可愛い女の子はすでにチェック済みよ」

学園中つて。

入学式が終わつて間もないといつのに、なんという早業。呆れると同時に、その行動力が羨ましいとも思つてしまつ。

「……コイツが可愛いつて？」

「……何か言ったかしら、アツキー？」

「いえ、何も言つておりません」

不穏な睨まれ方をしたので、じまかしておく。

「あつはつは、面白いやつらだ。とにかくよろしくな。俺のことば、

賢人、でいいから」

昼休みを挟んで、午後は部活紹介の時間となつた。

何も入学式の日にやらなくてもいいのに。

俺は、特に入りたい部があるわけではなかつたので、興味のない暇な時間となつてしまつていた。

「我々剣道部は、昨年の地区予選を突破し、そして……」

剣道部部長と思われる人が説明をし、ステージ上では部員が打ち合ひをしている。

部長はかなり綺麗な人だ。

「あの人もチェック済みなのか?」

何気なく隣の賢人に尋ねてみる。

「気になるのか?」

賢人は意味ありげに笑う。

「別にそういうわけじゃないけど

「ふーん? チェック済みというか、あれは俺の姉貴だ。美人だろ?」

「へえ」

「何だ、つまらない反応だな」

「どう反応してほしかったんだ?」

「そりやお前、俺もそう思うぜ我が義弟よ、とか

「あつそ」

「まったく、そんなことじゃ一流の芸人になれないぞ」

「なる気ないし」

賢人はやれやれというように肩をすくめた。

「まあ、俺はあとで剣道部の体験入部に行くから、そのとき紹介してやるよ」

「俺は剣道部に入るつもりはないぞ」

「まあそう言つな。美人部長に手取り足取り教えてもらえば気も変わらつて」

「いや、変わらないから」

「いやいや、変わるつて」

「いやいや、変わらないって」

「いやいやいや」

「いやいやいやいや」

「……不毛だ」

「ふつ、勝つたな。やはりお前には剣道部に入つてもうらつ」

「……もういいよ、何でも」

「うして、強引に押し切られる形となつた。

「あーねきつ」

「あら、賢人？ 邪魔しに来たの？」

部長さんが不思議そうな顔をした。

「邪魔つて……。体験入部だよ」

賢人が苦笑する。

「女子部部長の宇佐美亜希よ。よろしくね」

「あ、江藤秋彦です」

「私は森田優子です」

俺の横の優子が言う。

「というか、なんで優子までついてきたのだろう。

「俺は宇佐美賢人です」

姉弟なら自己紹介はいらないだろう。

脳内でツツ「ミニを入れておく。

「一人とも、よろしくね」

亜希さんは賢人の冗談をスルーした。

「ちょ、ちょっと姉貴……」

「あら、いたの、賢人？」

可愛らしく小首を傾げてとぼけた。

「姉貴、そのやり方で一体何人の男をたぶらかしたんだ？」

「失礼ね、まだ一人もいないわよ」

「まだ、ときましたか」

「そう、まだ、よ」

すました顔で答えた。

「仲いいんですね」

優子が感心したように言ひ。

「姉離れできなくて困つてゐるの」

亜希さんは困つたように言ひうが、實際はまんざらでもなさそな顔をしている。

「ふつふつふ、俺のパソコンは中学でも有名だつたぜ」

「なるほど。お前はパソコンだったのか」

「ふふふ、今でもお風呂一緒に入つてもんねー？」

「ええつ！？」

俺と優子の声が見事にハモつた。

「嘘教えるのはやめてくれ」

賢人は呆れたように言ひ。

「あら、ホントにしてもいいのに」

「冗談だか本気だかわからない顔で亜希さんが言ひ。

さすが姉だけあって、賢人のあしらい方をよく心得ている。

「んじや、俺は着替えてくるよ。キミタチは体験入部を楽しんでいつてくれたまえ」

「まるで既に部員であるかのよつた言い草だな」

「俺は経験者だからな」

納得できるような、それでもないような理由だ。

どうやら賢人は中学で剣道をやつていたようだ。

言われてみれば、竹刀と思しき細長い布袋を持っていた。

賢人はそのまま更衣室に消えた。

「それじゃ、体験入部ね。今日はそんなに激しいことはしないから、制服のままで大丈夫よ」

そう言つて、剣道場の中へと入つていく。

「じゃあ、まずはこれを使って竹刀の振り方から。徹くん、沙耶ちゃん」

亜希さんが一本の竹刀を差し出し、近くの部員を呼んだ。

「新入部員の指導、お願ひしていい？」

「あ、はい、わかりました」

「お任せください、部長」

二人は快く引き受けた。

部長は他の部員と練習試合をするようだ。

「美人の部長に教えてもらいたかったかもしけんが、大会が近いんだ。ここは俺たちで我慢してくれ」

「ちょっと、それって私が美人じゃないって言いたいわけ？」

徹くんと呼ばれた人の言葉に、沙耶ちゃんと呼ばれた人が返す。

「ははは、沙耶は面白いことを言つね。どう見てもその通りだらう？」

「一回死ね！」

「ぼげらつ」

沙耶さんが持つていた竹刀を徹さんの脳天に振り下ろす。

徹さんは謎の悲鳴を上げて沈み、動かなくなつた。

い、痛そう……

「さて、それじゃあ握り方からね。右手は柄の一番上、鐔つかにつける

ように、左手は柄の一番下を握つて」

沙耶さんが言いながら実演する。

それを真似て握つてみる。

「それを真正面に構えて、左足を少し引くの。これが基本の構えね」

沙耶さんの構えには、今にも打ち込まれそうな迫力があつた。

俺たちも真似てみるが、そんな迫力は出ない。

きっと、これが経験者と初心者の違いというものなのだろう。

ちらりと向こう側を見ると、賢人が着替えから戻ってきたところのようだ。

素振りを始めた賢人の構えには、沙耶さんと同質の迫力があつた。

「竹刀を真っ直ぐに振り上げて、真っ直ぐ振り下ろす」

沙耶さんはゆっくりと振っているが、その竹刀には大きな力が込め

られているように見えた。

これは、やつてみると意外と難しい。

ゆっくりでも、振った勢いで体がふらふらしてしまつ。

振り下ろしたところでぴたつと止めるには、結構な筋力がいるようだ。

「今日の課題は、これを見つ直ぐ打つこと」

沙耶さんが取り出したのは、ピンポン球だつた。

……結局、その日の練習中にピンポン球を見つ直ぐ打つことはできなかつた。

「……なんか成り行き任せで剣道部に入部することになつちやつたなあ」

「俺の美人姉貴に会えたんだからいいだろ?」

帰り道、なんだか不思議な気分だつた。

大会の近い剣道部は特別に下校時刻を越えての練習が認められるらしく、上級生たちはまだ練習している。

新入生三人での帰り。

剣道部に入るつもりなんてまるでなかつたのに、既に一員として認識されている。

まあ、入りたい部があつたわけでもないし、かまわないか。

「それにもかかわらず、ピンポン球の練習は難しかつたなあ。全然できなかつた」

「お前、二ブすぎるんじゃないか?」

「そうよ。私なんかすぐできるようになつたんだから」

「運動神経が異常にいいお前と一緒にするなよ。俺はフツーなんだから」

「私が普通じやないとでも言つのかしら?」

「いえいえ、そんなことはまったくぜんぜんこれっぽっちもありませんです」

ぐつと握られた拳に身の危険を感じ、すぐに否定しておく。

根拠なんてないけど。

なんとなく、今までとは違った学校生活が始まるような気がしてい
た。

第一話 出会いの季節（後書き）

お読みください、ありがとうございます。よろしければ評価・感想等いただけると幸いです。

第一話 変わらない日常と変わる気持ち

チユン、チユン……

朝。

鳥の鳴き声が聞こえる。

シャツ

カーテンが開けられたようだ。

瞼の向こうに、眩しい光を感じる。

「ほーら、もう起きなさいっ! いい加減遅刻するわよ」

「んむう……」

眠い。

といふかなんだか体が重いような……

昨日、何かしたつけ?

目を開くと、すでに制服を着た優子が立っていた。

「おはよう。目が覚めた? もう」飯食ってる時間ないから、さつさと着替えなさいよ

言われて時計を見ると、針はあらぬ時刻を指示していた。

「うげつ! こんな時間かよっ」

「はいはい、玄関で待ってるから、早くねー」

優子が部屋を出て行つてから、ベッドを出ようとしたりとさ。

「うつー?」

鈍い痛みが襲つてきた。

「あだだだだ……」

もづどこが痛いのかすらわからない。

ベッドから出るだけで一苦労だ。

「あ

思い出した。

昨日、賢人に剣道部に引っ張つていかれたんだった。

つてことは、筋肉痛か、これ……?

「原因がわかつても、痛みは引かないよなあ……」
当たり前のことを口にしつつ、のろのろと着替えた。

「お、おまたせ……」

「遅いつ！遅刻するわ……よ……って、どうかしたの？」

のろのろと体を引きずるように現れた俺を見て、優子が驚いている。
そういえば、ここにも同じ練習をしたはずだよね……？

「お、お前は何ともないのか……？」

「何とも、つて……何？」

「筋肉痛」

「ああ。アンタ、運動不足なんじやない？」

「違うつて。今まで使ったことのない筋肉使ったせいだつて」

「まあ、とにかく早く行きましょ。その調子じや、ホントに遅刻しちゃうかもね」

「つま」

俺たちは、軋む体に鞭打つて、のろのろと歩き出した。

「それにしても、なんでお前は平氣なんだ？」

同じ練習をしたのに、優子はケロッとしている。

「うん？ さあ……なんでだら？」

「実は怪しこヨガでもやつてるとか？」

「んなのやつてないわよ。いつもみたいにストレッチと柔軟を……」

「えつ？ いつもそんなのやつてるのか？」

意外な習慣だった。

「う、うん、まあね……昨日はお風呂で、腕とかよく揉み解したし

……」

お風呂で……。

い、いかん、イケナイ妄想が……

つて、優子相手に何考てるんだ、俺は。小さじ頃は一緒にお風呂も入つてたといつのこ。

「……？ どうしたの？ 急に黙り込んで……」

「い、いや……」

「あつ、わかつた。お風呂のこと聞いて、想像しちゃつたんだー？」

「アツキーのえつちー」

「ちつ、違つて」

「どうせ想像するなら、もつと胸元にボリュームのある人のほうが……
アツキー、なんか今、ものすごく失礼なこと考えてない？」

「うつ」

「悪かつたわねっ、胸がなくてっ！」

「いつ、いやつ、ナイなんてちつとも思つてないからー。ちょっと太めの男子・山下君より小さそうなんで、これっぽちもつ！」

しまつた、自爆だ！

「思つてるんじやない！バカ————つ！！」

「わわ————つ！？」

結局、悲鳴を上げる体に鞭打つて、教室まで走ることになつた。

「あ、あれ……？俺は一体……！？」

気付いたら昼休みになつていた。

「……何寝ぼけてんだ？1時間目からずっと寝通しだつたじやないか。……まだ授業初日だというのに」

前の席の賢人が呆れたように叫ぶ。

「そりだつけ？」

まるで記憶がない。

教室を見渡して優子を探すと、女子数人と一緒に昼食を摑つていた。ちらりと田が合つと、朝のことをまだ怒つているのか、すんごく睨まれた。

「……ん？」

すぐさま優子から田を逸らすと、逸らした先、窓の外に、キツネがいた。

じつとこっちを見ていたようだが、田が合つとすぐて綺麗な銀色の毛並みを翻して飛び降りた。

「どうした？」

「いや、今、窓の外に銀色のキツネが」

「……はあ？」

賢人は訝しげな表情をした。

「お前、まだ寝てんじゃないか？」「こ、4階だぞ？ キツネなんかいるわけないだろ。しかも銀色って何だよ」

「……それもそつか」

どことなくいてもおかしくないような不思議な雰囲気を持っていた

のだが、説明するのも面倒で、適当に相槌を打つておいた。

「んじゃ、頭もすつきりしたことだし、購買でなんか買つてくるよ」

「それじゃ、俺ヤキソバパンな」

「自分で行けよつ！」

「なはは、冗談だ。しかしだな、現実はときに冗談よりも残酷なものなのだよ……」

突然芝居がかり始めた。

「何言つてんだか」

「本当のことだぞ。おそらく、この時間ではもう、何も残つてはい

ないだろ？」

「んな大げさな」

まだ昼休み始まって10分くらいだぞ。

「ふふふ、帰つてきてからもそのセリフが言えるといいな。あそこは昼は戦場なんだ」

「あーはいはい」

これ以上こいつに付き合つてたら、本当に売り切れになつてしまつかもしれない。

賢人を適当にあしらつて、購買へ向かうことにした。

……およそ3分後、俺は、賢人の言葉が嘘でなかつたことを知つた。

現実はときに冗談よりも残酷なものなのだよ。

本当にその通りでした、賢人先生。

そんなわけで、本日の昼食は紙パックの牛乳だけでしたとさ。 とほ。

午後の授業が終わり、放課後。
なし崩し的にとはいえ、入部してしまった剣道部へ。
昨日と同じ、ピンポン球を打つ練習……

カンッ

「あつ」

初めて竹刀の芯で捕られた。

「やるじゃない。偶然だろ」うなび

横から優子が言つ。

態度がいつもと変わらないところを見ると、朝のことは忘れてくれたようだ。

「ふつふつふ、負け惜しみか？」

「冗談。私は昨日何回も成功させてるんだから」

「そーかそーか、今日は調子が悪いだけだよな」

優子はさつきから失敗してばかりだった。

「う、うるさいわねっ！……昨日の疲れがまだ残ってるみたいなの」

「ん、そうなのか？ 少し休む？」

今日の指導担当の徹先輩が言つ。

「甘やかしちゃダメですよ、先輩。上達しないからって言い訳して

るだけですから」

「ちつ、違うわよっ！本当にそつなんだつてばっし……つていうか
アンタ、筋肉痛はどうしたのよ？」

「む……そういえば」

いつの間にか、すっかりなくなっている。

それどころか、昨日よりも動きやすいようさえ感じる。

「午前中ずっと寝てたのがよかつたのかな」

「ふう、先生たち呆れてたわよ？ 初日だっていつの間にきなり爆睡なんだもん」

「起こしてくれればよかつたのに」

「あのねえ、先生たちに何回起こされたと思って……」

優子が言いかけたときだつた。

「……………！」

パパアンツ！

防具を打つ竹刀の小気味よい音と男女の声が、一いつづつ重なり合つて剣道場全体に響き渡つた。

しーんと静まり返る。

二人の剣士がお互いを打つた勢いで背を向け合つていた。

一人は男子部部長の久木田先輩、もう一人は……

「すごい……」

優子がつぶやく。

俺は背を向けていたので見えなかつたが、優子には見えていたようだ。

練習を再開したのか、剣道場のあちこちから竹刀の音が響き始めた。「そんなにすごかつたのか？」

「うんっ、一瞬の隙を突いた久木田さんの攻撃もすごかつたけど、それよりあつちの女の人がすごかつた！」

「ああ、亜希さんはすげー強いからな」

「ええつー？亜希さんなんですかー？」

その人がこちらを振り返ると、腰には『宇佐美』と書かれていた。

「あつ……」

「本当……」

その後の練習中の優子は、亜希さんに触発されたせいか、いつそう気合が入つていた。

「つ、疲れた……」

「俺の美人姉貴の勇姿が見られたんだからいいだろ？」

「……なんか昨日も似たようなセリフを聞いた気がするんだけど、私の気のせいしから？」

「おお、珍しく意見があつたな、優子」「賢人のシステムは筋金入りのようだ。

「ほんじゃ、俺、こっちだから」

「おう、じゃあな

「お疲れー」

途中の三叉路で賢人と別れた。

「それにしても、亜希さんかっこよかつたよな。俺は終わつたところしか見てないけど」

「うん、ホント惚れ惚れしちゃつたよ。あれは絶対見なきや損だつて。アツキーは残念だつたね」

残念だつたね、と言いつつ、優子の声は弾んでいた。

「うわー、なんかそういう言い方されるとすんごい損した気分になる

「あはは、なれなれ〜」

優子は、本当に楽しそうに笑つた。

そんな風に笑う優子を、不覚にも可愛いなんて思つてしまつたりして。

邪氣のない笑顔につられて、俺も笑つた。

そんな俺を見て、優子がまた笑つて。

優子が笑うのを見て、俺がまた笑つて。

おかしいことなんて何もないのに、なぜか笑いは止まらなくて。楽しいことなんて何もしていられないはずなのに、とても楽しくて。家の前で優子と別れるまで、ずっと一人で笑い合つていた。

部屋に入ると、着替えもせずにベッドに倒れこんだ。
さつきまではあんなに楽しい気分だつたのに。

今は、なぜかとても寂しい。

目を閉じると、すぐに優子の笑顔が浮かんできた。
そうすると、不思議な感情が胸の中を満たす。
心地よくて、苦しい。

心が躍るよつで、切ない。

そんな相反する感情が混ざり合つたよつな気持ち。

しかし、それは一瞬のこととて、その不思議な気持ちの正体を掴もうとしたときにはすでに消えていた。

「ふう」

少し大きさに息をつく。

開け放しのカーテンから窓の外を見ると、向かいの部屋のカーテン越しに光が漏れていた。
窓を開け、窓をノック。

「こんこんつ

。……。

。……。

無反応だった。

もう一度。

「こんこんつ

すると、カーテンと窓が開けられ、部屋の主が顔を出した。
いつもの部屋着に着替えていた。

「少しばタイミングを考えなさいよね。びっくりするでしょ」

「ん、タイミング悪かったか？」

「悪かったか？じゃないわよ。帰ってきてすぐなんだから、着替えてるに決まってるでしょ」

「ああ、そつか。悪い」

「まあ、別にいいけど。それで、どうしたの？」

「ん？」

「何か用事があるんじゃないの？」

「いや、別にないけど」

「あ、あのねえ……」

優子がため息をつく。

「用がなきや呼んじゃいけないのか？」

「いけないってことはないけどさ、私たち、さつきまで話してたで

「しうが」

そういえばそうだった。

でも、部屋の明かりが点いていて、優子の顔を思い出したら、体が勝手に動いていた。

なんだか恥ずかしくなってきた。

「ん、いきなり呼び出して悪かった。じゃあ、風邪引くなよ」

「あ、ちょっと……」

そのまま窓を開め、カーテンを引く。

「もう、何なのよ……」

そんな声が聞こえ、ガラス越しに、窓とカーテンが閉められる音がした。

なんか今日の俺はよくわからない。

特別変わったことなんて起こっていないのに、感じ方が違うというか。とにかく、今日はもう寝てしまおう……

翌朝、シャワーを浴びる時間を取りるために田舎ましを早め時間にセツトし、部屋の明かりを消して瞼を閉じた。

第二話 ケンカ

耳慣れた電子音が聞こえる。

「だー、くそ、黙れこの野郎！」

あまりの眠氣に、つい目覚ましにハラタリしてしまった。
でも起きなきやいけないんだよなあ……

俺は仕方な \langle
 \rangle

よくはわからないが、ため息が洩れた。
昨夜、何かを考えていたような気がするんだけどな……
あまりいいことではなかつた気もするけど。

何だっけ？

「おわつ！？」

目覚ましか再び鳴り始めた

「ん？」

「壊れてる……」

強く叫さずいたのか
アラームを止めるボタンが外れてしまつてし
た。

「…………」

憂鬱な気持ちになりながら、電池を外して止めておいた。

「モルヒーネ」

「うわっ！？」

部屋から出て、階段を下りようとしたところで、優子とぶつかりそうになつた。

ちょうど最後の一段を上りうつとしていた優子は、バランスを崩して

……
「あ、危ないっ！」

とつむに体が動いた。

「きやああっ！」

間一髪。

なんとか間に合つたみたいだ。

と思つたら、あ、あれ？

「うわわっ！？」

ドタン！バスン、ゴロゴロ……バタバタ、ゴンッ！

「あだつ！？」

……見事に一階まで転げ落ちた。

しかも最後は頭打つし。

「だ、大丈夫、アツキー……？」

優子が心配そうに覗き込んでくる。

「あ、ああ、このくらいなんともない」

「またそんな」と言つて。ほら、頭打つたんでしょう。ビリ。

「ここ」

優子の手がそつと触れる。

「つ……」

「あ、ごめんね、痛かった？」

「い、いや、平気……」

優子の手が触れていると、せつままでジンジンと痛んでいた箇所から、痛みがスーと抜けていくようだつた。

「その……ごめんね。……つていうか、ありがと」

「え？」

「私のこと、庇ってくれたでしょ？だから、ありがとう」

そう言ひて、優子は優しく微笑んだ。

「…………」

どきどきしていた。

……ベ、別に、優子が可愛いとか、笑顔に見とれちやつたとか、そういうことじやないからな?

「つて、誰に言い訳してんだ、俺は

「え?」「え?

「な、なんでもない……」

「…………?あ、それより、今日はいつもより少し早いじやない」

「ああ、昨日風呂入らずに寝ちゃつたから、シャワー浴びようと思つて。少し汗臭いだろ?」

「それでまだ着替えてないわけね」

優子は納得したよう言つた。

「んじや、そういうわけだから」

「じゃあ、私はご飯の用意しておくれね」

「用意つたつて、温めるだけだろ」

共働きの両親が用意しておいてくれる朝食を温めるだけなので、人でもできるのだが……

「はいはい、遅刻しけやうから早くしてよね」

優子はそのままキッチンへ入つていった。

「やべり、ほんとに時間がなくなる」

俺は、シャワーをさつと済ませることにした。

シャー——

お湯がシャンプーの泡を流していく。

「ふああ~…………」

眠い。

「やつぱ朝はギリギリまで寝ていたいよなあ…………」

「じゃあ夜のうちに済ませておきなさいよなー

「ああ、いや、昨日は特別だったところか…………」

「…………」

「へー? どう特別だつたの?」

「うーん、なんか考え事してたような気がするんだよなあ」「どんなこと考えてたの?」

「それが思い出せなくて。あんまりここじとじやなかつた気が……」

「ちよつと待て。

「なんでお前がそこにいるんだよつ!」

脱衣所から返事をしていたのは優子だった。

「あはは、やつと氣付いた」

「あはは、じゃないつ!」

「背中、流してあげよつか」

「せなつ……」

「……」

「……」

「ちよ、ちよつと、本気にしないでよつ? 少しからかつてみただけなんだからねつ」

「するかつ! やつをと戻つてろつ!」

優子はなにやらぶつぶつと言つながら、脱衣所を出て行つた。
「つ、疲れた……」

キーンゴーンカーンゴーン

「賢人、学食でも行くか?」

「おーおー、今日は土曜だから学食も購買もやつてなこぞ?」

「えつ?」

言われてみると、賢人は既にコンビニの袋を持つていて。

「来るときには買つておけよな。コンビニ、結構遠いぞ」

「うーん……」

土曜なら授業は午前中だけで終わりだ。

あとは部活だけか……

「仕方ない、買つてくるよ」

「部活、1時からだから、あんま時間ないぞ」

「わかった」

賢人と別れ、小走りにコンビニに向かう。

「ん？」

校門を出ようとしたりで、少し離れたところに見知った人影を見つけた。

あれは、優子と、徹先輩か……？

一人で何やら楽しそうに話している。

なんだか胸がざわつく。

まあ、水を差すのもなんだし、今は昼食の調達が先決だ。

そう思っているにも関わらず、足は自然と一人のほうへ向こうとしている。

二人の会話に入りたいわけではない。

二人の間に入りたい。

自然とそんなことを考えていた。

……何考えてんだ、俺。

楽しそうなんだから、放つておけばいい。

何を話しているのか気になるなら、このあとの部活のときにでも聞けばいい。

それなのに、そうしようとしたしない俺がいる。

……どうかしてる。

俺は、全速力で校門を後にした。
なぜかイライラしていた。

胸が苦しい。

嫌な動悸がする。

膝ががくがくと震え、視界は白くなっていく。

体は熱く、全身の汗腺から冷や汗が吹き出し、寒気がする。
どうしようもないくらいの苦しさと、行き場のない怒りを感じている。

この場につづくまつて泣き出したい。

され違う、名前も知らない人に、殴りかかってしまいたい。

「コンビニの前に古いタイプの不良でもいたら、ケンカになるかな……

そんな馬鹿げたことを思いながら、ただひたすらに走った。

「お、おお、早かつたな、秋彦」

息を切らして教室に飛び込むと、賢人が驚いたように言った。

全速力で走ったのだから当然だ。

「まあな

「なんだよ、機嫌悪いな」

「そんなことないって」

幸いにも古いタイプの不良には出くわさず、無事に昼食を買った。小銭をレジのカウンターに叩きつけたときには当然店員は驚いた様子だったが、俺が不機嫌なのを悟ったのか、何事もなく対応していた。

コンビニの接客マニュアルには、『不機嫌な客の対応』なる項でも存在しているのだろうか。

「何があったのかは聞かないほうがいいか?」

「何もないって」

事実だつた。

本当に、特別なことは何もないのだ。

部活の先輩と後輩が話す、なんて、自然極まりない。

それなのに、優子と徹先輩が話しているのを見かけてから、なぜか無性に腹が立つ。

それと背中合わせのように、苦しさが付きまとつている。

自分のことなのに、ぜんぜんわからない。

俺は、むつりと押し黙つたまま、昼食を摂つた。

賢人は気を遣つたのか、話しかけてこなかつた。

今日の部活は、打つ練習だつた。

沙耶先輩が、竹刀の両端を持つて頭上に一文字に構え、それを面の

要領で打つ。

「力を入れすぎないで。上体を楽にして、素早く竹刀を振り下ろすの」

「叩くんじゃなくて、相手を打つイメージよ」

「竹刀が当たるポイントを意識して。ビリビリ叩てるか、コントロールするの」

一本打つことに、沙耶先輩がアドバイスをくれる。

しかし、せっかくアドバイスをもらつても、そのほとんどは右から左に抜けていってしまう。

どうしても、隣でやっている優子と徹先輩が気になるのだ。

会話内容は、俺と沙耶先輩の会話と大差ない。

同じ練習をしているのだから当然だ。

だが、優子はとても楽しそうに返事をしているよう思える。

「……だから何だつてんだ?」

「え? 何?」

「あ、いえ、独り言です」

「ふふ、練習中に自分の世界にトリップするなんて、アッキーはホント想像力、っていうか妄想力が豊かななんだから」

隣から優子が口を挟む。

「つるさいな。いちいち耳をそばだててないで練習しろよ」

「だ、誰がそばだてるのよ?」

竹刀を振り回し始めた。

「うわ、ちょっと、あぶつ、危ないって」

「ちょっとした冗談なのに、何を慌てるんだ?」

「はは、優子ちゃん、江藤君をいじめるのはそれくらいにしてあげなよ。ほら、打つのはこっち」

徹先輩はそう言つて、竹刀を頭上に構えた。

……『優子ちゃん』?

昨日のピンポン球の練習のときは、『森田さん』だったはずだ。たつた一日で、そんなに仲良くなつたのだろうか。

胸がざわつき始めた。

昼休みに感じたものよりも強烈な、どす黒い感情が渦巻く。

なぜか徹先輩が憎い。

今、徹先輩の顔を見たら、きっと手にした竹刀で殴りかかってしまう。

それほどまでに膨れ上がった衝動を抑えようと、俺は自分の足元を睨みつけた。

「……くん、江藤君」

沙耶先輩の声に、はつと我に返った。

「大丈夫？ 具合悪い？」

「え？ あ、はあ……」

肯定とも否定ともつかない返事をする。

どうやらかなりひどい顔をしていたらしい。

「大丈夫か？ 保健室、行くか？」

「つ……！」

背後からかけられた徹先輩の声に、体がびくっと震えた。

「あ、いえ、少し体調が悪いだけですから。……すいません、今日は早退させてください」

徹先輩の顔を見ないようになろうと、俺は竹刀を捨て、返事も聞かずに走り出した。

「あ、おいつ」

「ちょっとつ」

「ど、どうしたのよつ」

3人の戸惑ったような声が聞こえてきたが、無視して走り続けた。

「くそつ

ぼすんつ

部屋に入り、クッショーンを思いつきり殴りつける。

「は、はは……」

ちつとも痛くなくて、思わず笑ってしまった。

そのまま脱力したようにベッドに倒れ込む。

「何なんだよ……」

自分の心が全くわからない。

いつも通りに行動できない自分が歯痒い。

何かが変わったはずなのに、何が変わったのかわからなくてイライラする。

自分の中の、嫌な感情に振り回されるのが不快だ。

「…………」

目を閉じる。

浮かんでくるのは、優子の顔……

笑つたり、怒つたり、照れたり、忙しいヤツだ。幼い頃からずっと見てきて、今なお毎日見る顔。親の顔より、自分の顔より、頻繁に見る顔。

なのに見飽きることのない、不思議な顔。

その顔が、ふと寂しそうな笑みに変わり、隣に現れた徹先輩の手を取つて……

「うわああああああああっ！！！」

理由のない激しい憤怒と、それをすっかり呑み込んでしまうような絶望感に、思わず絶叫し、がばっと体を起こす。辺りは真っ暗だった。

どうやら眠ってしまったらしい。

こんこんつ

窓が叩かれた。

優子が向かいの窓から身を乗り出している。

「大丈夫？なんかすごい叫び声が聞こえたけど」窓を開けるなり、そんなことを言われた。

「別に、なんでもない。……何か用？」

正直言つて、あまり話したい気分ではない。イライラが、今にも溢れてしまいそうだ。できれば一人にしてほしいんだけどな……

「うーん、用つていうか……部活のとき、殴りしたの?」

「別に」

「……アツキー、機嫌悪い?」

「別に」

「アツキー、さつきから、別に、しか言つてないよ?」

普段通りの俺なら、さらりと流せるところだつただろ? が……

「ほつとけよつ! 何なんだよ、お前つ!」

必死に抑えつけていた激情が破裂した。

「保護者ヅラしやがつて! 一人になりたいつてんだよつ、わかんねえのかよつ!」

優子はただ心配してくれただけなのに。

「いつもいつも、お節介なんだよつ! いい加減にしろつ!」

言つつもりがないどころか、考えてもいなかつたことが口からポンポン飛び出す。

「迷惑なんだよつ! 俺に構うなつ!」

「……何よ」

優子の顔が、だんだん怒りに赤くなつていぐ。

「少し気になつただけじやないつ! 一人になりたいならはつきりそう言いなさいよつ! 私だつて好きでアンタに構つてるわけじやないんだからつ! 一人じや何もできぬいくせにつーアンタのこと心配なんかぜんぜんしてないんだからねつ!」

「心配してないんだつたら気にかけるなつ!」

「うるさいつー! アンタのことなんてミジンコほどにも思つてないわよつーバカッ!!」

ピシャツ!!

勢いよく窓が閉められ、カーテンが引かれる。

「……はあ……」

優子の姿がカーテンの向こうに見えなくなると、冷静な思考が戻ってきた。

と同時に襲つてくる、激しい自己嫌悪と後悔。

「ハつ当たり、しちやつたな……ごめん……」

聞こえるはずもないのに、一人呟く。

のろのろと窓を閉め、カーテンを引いた。

大した長さは生きていながら、確実に人生でワースト3には入るであろう、陰鬱な夜だつた。

第四話 告白、そして……

4月13日、木曜日。

ザア———

雨が降り続いている。

教室の窓から見える校庭には、巨大な水溜りができる。

キーンゴーンカーンゴーン

「それじゃ、今日はここまでな。大事なところだから、しっかり復習しておけよ」

「きりーつ、きをつけー、れー」

週番の間の抜けた声で礼をして、教師が教室を出て行く。
昼休みになつた。

優子のほうへ視線を投げかけると、目が合つて、ふいと逸らされた。
土曜の夜にケンカしたきり、まだ謝っていない。

優子とまったく話をしない連続記録、5日目。
今までの自己ベストは3日くらいだろうか。

ぶつちぎりの過去最高記録であり、今なお更新中。
あれから謝ろうと思つて優子の様子を窺つているのだが、チャンス
は一向に訪れない。

「お前らまだ仲直りしていないのか？」

雰囲気を察したらしい賢人が話しかけてくる。

「まあ……」

「何が原因か知らんけど、早いとこ謝つてやれよ。優子ちゃん、待つてんだろ」

「いや、待っちゃいないだろ」

優子の様子を見る限り、目が合つてもすぐに逸らすし、まだ怒つて
いるように思つう。

「はあ……。お前の目は節穴か」

賢人は呆れた顔で大げさにため息を吐いた。

「とにかく、この昼休み中に謝っちゃまえよ。絶対待ってんだから」「うーん……」

よくはわからないが、賢人はそれなりに自信があるようだ。
第一、このままチャンスを待つっていても、結局謝れないままするず
るといく気がする。

よし、謝ろう。

「ゆう……」

「優子ちゃん、いるー？」

気合を入れて、いざ話しかけようとしたところで、邪魔が入った。

「あ、徹先輩、どうしたんですか？」

優子が邪魔した人のところへいく。

仕方ない。

徹先輩の用が済むまで待とう。

やたらとイライラしながら、俺は待つことにした。

「……なんか、やけにイライラしてないか？」

「……別に」

徹先輩に対する得体の知れないイライラは、なるべく顔に出さない
ようにしていたのだが、やはり隠し通せないようだった。

徹先輩は特段性格の悪い人ではない。

むしろ、面倒見がよく、優しい。

長い付き合いではないが、いい先輩と言つて差し支えないし、俺も
それはわかっているつもりだ。

俺は、『善人ヅラをした悪人を本能的に見極める特殊能力』なぞを
備えているわけでもないし、まして、彼がそのような人物だとも思
えない。

つまりは、敵意を持つ理由がないのだ。

なのに、俺は彼に対し敵意を持っている。

これは、本気で何とかしなくてはならない。

「あれ？」

教室の入り口で話していた二人は、そのままどこかへ行くようだ。

「あらら、タイミング悪かつたな。……って、どうした？さっきより機嫌悪くなつてゐみたいだが」

「なんでもない」

平氣を装うが、胸の奥深くに手を突き刺され、心臓を鷲掴みにされているかのような苦しみが襲つてきた。

「お、おい、ほんとにどうした？ 悩みでもあるのか？」

「……悩んでるよう見えるか？」

隠し通すのは、やはり無理なようだ。

賢人なら、相談してみてもいいかも知れない。

「やっぱなんでもなくない。……かも」

「なんだよそりや。話す気になつたのか？」

「ああ」

それから、徹先輩への敵意について話した。

徹先輩を見ると、イライラすること。

同時に、胸が苦しくなること。

その理由がわからぬこと。

「それって、いつからだ？ 出会つたときから？」

「えつ？」

言われて気付いた。

出会つたときには、こんな感情はなかつた。

……というか、出会つたときは沙耶先輩に沈められてたんだよな。その次の日も別に感じなかつた。

さらに次の日、土曜日……

そうだ。

「土曜日の昼だ……」

「何があつたのか？」

何のことはない、優子と徹先輩が話しているのを見かけただけだ。だが、そのときは確かにこの感情を抱いていた。

それを話すと、賢人は途端にげんなりした。

「……それって、ただのヤキモチだろ」

「は？」

「だから、ヤキモチだつて。お前は優子ちゃんが好きで、徹先輩に嫉妬してんの」

優子が好き？

俺が？

「……んなバカな」

そう言いつつも、頭のどいかではなるほどと納得していた。

「バカはお前だ」

賢人は呆れたように言つ。

そう、バカは俺だ。

朝起きるのが辛くないのも。

興味なんてなかつたはずの剣道を真面目にやつているのも。いつも通りの帰り道が楽しいのも。

全部、優子がいたからだつたんだ。

共働きの両親が忙しくなつて、出社が朝早くくなつたとき

『おじさんもおばさんもいないんじや、寝坊ばっかでアッキーがヒツキーになつちやうでしょ？私が起こしに行つてあげるわよ』

秀明学園を受けると決めたとき

『アッキーじゃ学力不足もいいといよ。私が教えてあげる』

階段から転げ落ちたとき

『大丈夫？頭打つたんでしょ？ど二？』

いつでも隣にいて、大なり小なり、何かがあるたびに助けてくれた。

『優しい子になるようひつて、優子つてつけたんだつて。そのまんますぎて笑っちゃうよね』

優子は、いつだって優しかつた。

素直じやないとこりがあるけど、いつでも心の中では氣を遣つてくれていた。

そんな優しい優子に向かつて、俺は……

『お節介なんだよつー』

真正のバカだ。

教室を見回すが、優子はまだ戻ってきていないようだ。

早く謝りたい。

早く、以前のように話したい。

「ちょっと優子探してくる」

「あ？ おう、次、体育だから、早めに戻つて来いよ」

賢人の声を背中に聞きつつ、俺は教室を飛び出した。

「ん？」

屋上への階段を通りかかったとき、上のほうから話し声が聞こえた。

天気は雨。

こんな日に屋上へ出る人はいない。

少し気になつて、上つてみる。

「……俺は、君のことが好きだ。俺と付き合つてくれやべつ。誰かの告白だったのか。慌てて引き返そうとしたときだった。

「…………うれしい」

「つー？」

聞こえてきた声に、俺は耳を疑つた。

優子の……声？

そつと影から覗いてみる。

「私もあなたのことが、好きです」

そう言った女子生徒は、間違いなく、優子だった。

そしてその正面にいる男子生徒は、徹先輩だった。

そんな……

そんな……

足元が崩れ去るような感覚。

胸が苦しくなり、呼吸は荒くなり、手足の感覚は薄れていく。
目がちかちかし、心臓は激しく脈打ち、血液の流れる音が聞こえる。
頭が真っ白になり、世界が傾く。

どさつ

「えつ……アツキー！？」

優子の驚いた声が聞こえた。

まずい、立ち聞きしてたことがバレてしまった。

なんとかフォローしなくては……

「わ、悪い、立ち聞きなんてするつもりはなかつたんだけど……」

「えつ？あ、それもだけど、倒れて……それに顔色も……」

「ほんと悪かつたつ」

「ちょ、ちょっと」

反射的に立ち上がり、走り出す。

自分の気持ちに気付いて、わずか数分で失恋するとは。

気付くのが遅すぎた、ということだろうか。

……失恋って、苦しいものだつたんだな。

どにに向かっているのかもわからず、ひたすらに走り続けた。

気付いたら教室に戻っていた。

「どうしたよ。死んだような顔して」

「……そんな顔してるか？」

「ああ。……その様子だと、優子ちゃんには謝れなかつたのか？」

「……忘れてた」

賢人は呆れた顔をした。

この顔、今日何回目だ？

「まあ雨だし、次の体育は女子も体育館だらうから、チャンスはあるかもな」

「体育？」

「おいおい、忘れたのか？男子はバスケ、女子は……確か、ハンドボールだつたか」

チャンスがあるどころか、最悪だ。

あんなところを目撃して、優子とどんな顔で会えぱいいといふのか。

「……俺、体育休むわ」

「何バカ言つてんだ。お前がいなくなつたらウチのチームが困んだ
る。ほら行くぞ」

「うわ、ちょっと」

結局、賢人に押し切られることになった。

……俺、押し切られてばかりだな。

よく考えれば、同じ体育館内とはいえ、男子と女子は別々に授業をするのだから優子とは特に顔を合わせずに済む。
そして、つつがなく終了するはず……

「あ、危ないっ」

「えつ」

女子と男子のスペースを隔てるネット付近にいた俺。
振り向くと、接近中の……ボール……？

「んがつ！？」

ゴム製の硬いハンドボールが、見事に鼻に命中した。

「あだだ……」

ぼたつ

「……？」

ぼたぼたつ

足元に赤い斑点ができる。

鼻血が出たらしい。

「あつ、ごめ……あ……う……」

ボールを投げたと思われる女子生徒が謝りつつして、なぜかためらつた。

「あつ……」

優子だった。

……正直、今はあまり顔を合わせたくない。

「すいません、保健室行きます」

俺は逃げ出した。

「ふう……」

ぼたぼたつ

一応押さえではいるが、血が垂れてきてしまつ。

ぐいっ

鼻にティッシュが押し当たられた。

「使いなさいよ」

氣付くと、優子がいた。

「…………あじがと」

短く答え、ティッシュで鼻を押さえる。

わざのようになれてぐる」とはなくなつた。

「…………」

無言のまま並んで歩く。

謝るチャンスなのに……

なのに、こぞ謝らうとするが、なぜか勇気が出ない。
優子はちぢれちぢれ見ていた。

「…………何だよ」

「…………」

無視された。

「…………私は、謝らないからね」

「…………？」

「何でもないわよつ。じゃあ、お大事につ」

まったく大事ではないやうにそつこつと、優子は踵を返し、もと来た道を引き返した。



「はあああ～…………」

どうして私は、いつも素直じゃないんだね?」

「はあああ～…………」

ボールをぶつけたのは、どう考へても私が悪い。

ケンカしたこととは関係ないんだから、謝ればよかつた。心配だし、ぶつけたときとつさに謝れなかつたからつて、ポケットティッシュまで持つて追いかけたのに。

……結局、謝らずに戻つてしまつた。

「……意地つ張り」

今更言つても仕方がない。

そのときその場で意地を張らずに謝れる人ことを、素直な人、と呼ぶのだから。

昼休みのことをアッキーに見られたのも最悪だつた。

「……アッキー、勘違ひしただらうな」

当然だ。

傍から見れば、告白する男子生徒とそれを受けた女子生徒。

言い触らされることを恐れているのではない。

誰かにからかわれようが、冷やかされようが、そんなの構わなかつた。

ただ、アッキーにだけは、私には他に好きな人がいると思われなくなつた。

こんなことになるのなら、徹先輩を焚きつけたりなんてしなければよかつた

『相談があるんだけど』

『あんまり人に聞かれたくないから、屋上行きの階段に行こう』私は言われるまま、徹先輩についていった。

相談の内容は、徹先輩には好きな人がいる、とのことだつた。

『相手は俺の幼なじみだからさ、同じく幼なじみのいる優子ちゃんに話を聞きたいと思つて』

徹先輩と沙耶先輩は、幼なじみらしい。

それで、幼なじみを恋人として見ることができるかどうか、と聞かれた。

『まだ会つて間もないのに、こんな相談するのどうかと思つただけ

二

そう言って、徹先輩は笑つた。

私は、そういうのは人によると思う、と答えた。

たたかず私自身に「して言えは恋人として見る」とはできぬ。とも

そこで話は繰れるは可か

『じゃあ、皆の練習をしておおおしゃいな

『え？』

練習台に

そんたの

『ここだと人が来るか先しれないし』

人に聞かれたくない」とだからつてここに連れて来たのは徹先輩

せんから

『……それもそつか』

『ほら、それじゃ、私は沙耶先輩です』

二〇一〇年

御先輩は叫ぼうとしていた。

「俺のことが好きだ。俺と付合ってくれる

放課後。

部活中にそれとなく観察していたのだが、優子にも徹先輩にも、特に変わった様子は見られなかつた。

「江藤君、ちょっといいかな？」

徹先輩が話しかけてきた。

『優子と付き合つことになつたから。幼なじみの君にせましめおこうと思つてね』

そんな言葉が続くのだろうか。

見てしまつたので知つてはいたが、改めて口にされると辛いものが

ある。

「あ、すいません、俺、今日は用事があるんで」

「あ、おいつ」

俺は走り出した。

「はあっ……はあっ……」

なぜか真っ直ぐ帰る気になれず、商店街のまづへ来ていた。
だからといって、商店街に用事があるというわけでもない。

「ん？」

商店街には不似合いな、銀色の美しい毛並みのキツネがいた。

「よひ、油揚げでもくすねにきたのか？」

しゃがみこみ、話しかけてみる。

キツネはどこか不機嫌そうに、「ん」と一聲鳴いた。

青玉のよつな深青の双眸は、ともすれば人間を越えるほどの利発さ
を感じさせる。

「あつ」

ふさふさの尻尾を揺らしながら、キツネは一歩散に去つてこつた。

「…………帰ろ」

結局、そのまま帰ることにした。

いずれにしろ、優子には謝らないといけない。

土曜のケンカのこと、今日の昼休みのこと。

それと、体育の時間、保健室に行く途中でティッシュをもらつたこ
とのお礼もだ。

「あつ」

自宅の近くまで来て、優子の後ろ姿を見つけた。

今度こそ、謝るんだ

「優子」

「つ！」

優子は振り返り、俺の姿を認めるべく走り出した。

「ま、待てって」

俺も走り出す。

かなり距離がある。

家まではあとわずかだ。

追いつけない……

……ならば、ここからでも聞こえるようになるまでだ。

「優子、つ、ごめんっ」

日が落ちた、真っ暗な住宅街にて、俺の声が響いた。

優子が足を止め、振り向く。

「ごめん」

はつきりと優子に届くようにならうとして、俺は頭を深々と下げる。

優子が許してくれるまで、上げないと決めた。

ずっと、ずっと、とても長い時間、そうしていた。

……いや、実際にはわずかな時間だったのかもしれない。

足音がすぐ近くで止まる。

「アツキー」

頭上から優子の声がした。

「ひどいこと言つて、ごめん」

「…………」

「あんなこと言つつもり、なかつたんだ。言い訳に聞こえるかもしれないけど、勢いで言つちゃつただけで、あんなこと思つてるわけじゃないんだ」

頭を下げるまま言った。

「……いいよ、アツキー。許してあげる。……顔を上げて」

顔を上げると、優子は微笑んでいた。

見る者すべてを救ってくれるような、優しい微笑みだつた。

そんな優子を見ただけで、ここ数日の苦しみなど吹っ飛んでしまう。一仕事終えたような開放感を感じつつも、俺にはまだやることが残つてゐる。

「……あと、昼休みのこと、『めん』

「あつ……」

「なんていうかさ、あの、俺も優子のこと好きだけど、優子には幸せになつてほしいって気持ちのほうが強いからさ、俺、応援するよ

「えつ！？アツキー、今何て……」

優子が驚きに大きく目を見開いた。

「あ……」

言われて気付いた。

一仕事終えて気が抜けたのか、思わずとんでもないことを口走つてしまつた。

「いや、えつと……何て言つたか……」

何かフオローしなくては。

頭をフル回転させるが、何も思いつかない。

「……あのね、アツキー」

優子は気持ちを落ち着けるようにしてから言つた。

「それは、アツキーの勘違いなの。あのとき、徹先輩は告白の練習をしてただけなの」

「……へ？」

「徹先輩は沙耶先輩が好きで、その相談を私にしてきたの。それで、私が告白の練習をしておいたほうがいいって……」

「な、なぬっ？」

なんだそりや。

「だから、その……『めんね？』

……何だか力が抜けてしまった。

「それで、あの……さつきの返事なんだけど……」

優子は感情を押し殺すような表情だった。

恐怖。

先ほど力が抜けた全身の筋肉が、一瞬にして強張った。
聞きたくない。

それはきっと、いい返事ではないから。

「あつ、ごめんっ、俺風呂入んなきゃいけないからっ」

「あ、アツキー！」

めちゃくちゃな言い訳を残して、俺は家に飛び込んだ。

第五話 銀色のアイツ

ばたん

後ろ手に自室のドアを閉めた。

電気もつけずにベッドに腰掛ける。

「ふう」

考えているのは、さつきのこと。

『なんていうかさ、あの、俺も優子のこと好きだけど、優子には幸せになつてほしいって気持ちのほうが強いからや』

アツキーは私が徹先輩と付き合い始めたと勘違いしていた。でもね、違うんだよ。

あれはアツキーの勘違い。

アツキーにだけは勘違いされたくなかつた。

アツキーは……私の、好きな人だから。

ふと向かいの窓を眺めると、ちょうど電気がついて、カーテンの隙間から光が洩れてきた。

「アツキー……」

私だつて、アツキーと同じ気持ちなんだよ。

私は、アツキーのことが好きで好きで。

もちろん、付き合いたいっていう気持ちはある。

アツキーの彼女になりたいし、アツキーとデートだつてしたいし、

アツキーと恋人らしいこともしてみたい。

だけど、それ以上に、アツキーには幸せになつてもらいたい。

だから……『ごめんなね。

私、アツキーの気持ちには、応えられない。
応えちゃいけない。

ほかの誰よりも、好きだからこそ。

一番に、幸せになつてもらいたいからこそ。

私と恋人同士になつたら、不幸になつてしまつから。

だつて、私は。

私は
……

卷之二

「うわあっ！？」

突然の大声は、俺は文字通り飛び起きた

道義に在る所の事なり。」

元二、那屋毛出一弓。

なんだあれ？

やたらと機嫌がいい。

昨日の今田で、なぜあんなに明るく振舞えるのだろう。

俺なんかは、朝どんな顔して会えはいいのかわからず、昨夜はなか
なか寝付けなかつた。」

憂子が帝の「おまじない」を頼り、二年間が経つ。

「……それはなんか悲しそうだなー

とにかく遅刻はまずいので、急いで着替えることにした。

卷之三

教室に入った途端、優子が声を張り上げて挨拶する。

お前元気だよなあ

ト。次に力元気な連絡を。キラ定期巡回をおし

バンツ

「いてつ」

思いつたり背中を叩かれた。

頼むから、手加減してくれ。

「よう、お一人さん」

「おはよ、賢人くん」

「おう、賢人」

「秋彦は相変わらず尻に敷かれてるのか?」

「はいはい、バカはほつときますよー。……あ、おはよー、まりりん、さゆっち!」

優子は、よく一緒にいるクラスメイトのところへ行く。

賢人は呆気に取られたように、ぼーっと優子の背中を眺めていた。

「……なあ」

「うん?」

「優子ちゃん、何かあつたのか?」

「……いや、特に聞いてないけどな。何で?」

告白してしまった、という事件はあつたが、あまり言ひ触らすようなことでもない。

だから俺は、茶を濁しておいた。

「優子ちゃん、妙に明るいっつうか、空元気っぽいっつうか、とにかく変じじゃないか?」

「……」

「ま、いいけどな」

賢人は肩をすくめ、席についた。

「ああ、江藤君、ちょっとといいかな」

「あつ、徹先輩」

「昨日のことなんだけど……」

「とーおーるつ、帰ろつ」

「うわつとと……」

徹先輩に、沙耶先輩が後ろから抱きついた。

「あ……」

そして徹先輩越しに俺と田が合つと、恥ずかしそうに離れた。

「……ええつと」

「昨日、優子から全部聞きました」

「あ、ああ、そうなんだ。それはよかったです。……俺たち、付き合ひことになつたんだ」

「はは、一目瞭然ですけどね」

「はあ、恥ずかしい」と見られかやつたな～」

沙耶先輩は顔を赤くしながら、まんざらでもなさそつだ。

「……ところで、優子ちゃん今日変だったけど、どうしたの? 何かあつた?」

「昨日のことでのケンカでもしたか? それだったら、俺も謝らないといけないな」

「……やっぱり、変だと思いますか?」

「…………？」

二人は不思議そうに顔を見合せた。

「変つてこうか……」

「…………」

俺は、この一人の、といつか徹先輩の恋路について知っている。この一人になら、話してもいいかもしない。

「あの……俺、昨日、優子に告白しちゃつたんです」

「ええつ?」

そしてその返事は……

聞かずに逃げ出したんだ。

「たぶん、それが原因なんじゃないかと……」

「それ、ちょっとおかしくない?」

「え?」

「なんで、告白されて無理矢理明るく振舞う必要があるの?」

「俺もそう思う。優子ちゃんのあれは……苦しんでるのを周りに知られたくないような、そんな態度だつて気がする」

「だから、俺の告白が苦痛だつたんじゃ……?」

なんだか自分で言つて悲しくなつてきたぞ。

俺の気持ちが、優子にとつては苦痛だつたなんて。

「それはないわ。私の見る限り、優子ちゃんも江藤君のこと、憎からず思つてたように見えたからね」

「んー、俺から見てもそつかな。仮に好きじゃなかつたとしても、告白をされて苦痛に感じる相手じゃなかつただろうな」

「……つまり、優子は今苦しんでいるのは確かだけど、その原因は俺の告白ではない、ということですか？」

「ああ。加えて、その苦しみは他人に知られたくないもの、かな」

「どういうことだろう。

優子が他人に知られたくないこと。

そんなもの、皆田見当もつかなかつた。

先輩たちと別れ、一人帰路につく。

昨日の夜、俺が謝ったときには、優子は特に変わった様子はなかつた。

そして今日の態度。

それを考へると、やはり俺の告白が関係しているとしか考えられない。

……いや、もしくはあのあと、家で何かあつたのかもしれない。
両親が大ゲンカしたとか。

いや、大ゲンカなんかすれば隣のウチまで聞こえてくるはずだし、そもそも優子の両親はすぐ仲がよく、滅多なことではケンカしない。

ならば、親に叱られたとか。

しかし、優子が親に叱られたくらいで苦しむだろうか。

それに、そんなことが『知られたくない苦しみ』に当てはまるだらうか。

わからない。

こんなに長い付き合いだといつのに、俺は優子のことを何一つわかつていなかつたのか。

「うう～ん……」

「相当、悩んでるみたいだね」

「えつ？」

突然聞こえてきた、涼やかな声。

年長の者が持つ、特有の落ち着きを孕み、そしてなお若々しい生氣をも感じさせる、耳に心地よい声だった。振り返るとそこには……

誰もいなかつた。

「あ……あれ？」

幻聴？

「幻聴などではないよ。僕はここだ。足元をじらんよ」

足元にはキツネがいた。日が沈み、暗い夜道にぼんやりと浮かび上がるその毛並みは、神秘的な銀色。

ぴんと立つた耳は、辺りを警戒しているのか、ぴょーぴょーこと動く。ゆらゆらと揺れる毛足の長い尻尾は、月明かりに照らされてきらきらと輝ぐ。

俺を見上げる青玉サファイアを湛えた双眸には、人類を凌駕するほど の英知を思わせる。

「やあ、初めまして。……いや、また会ったね、のほうがいいかな？」

キツネが喋つている。

そんな異常な現象が田の前で起こつてゐるといふのに、まったく驚かない自分に驚いていた。

このキツネは、『普通じゃない』ことが自然に思えた。

「ヒトの言葉で話をするのは今日が初めてだけ、僕たちはすでに会つているよ。……一回、ね」

一回も？

「あつ……！」

「思い出したかい？」

いつかの商店街で。いつかの教室で。

「ああ、あのときの」

「……一応言つておくけど、僕は油揚げをくすねたりはしないからね」

根に持つていたらし。

「それよつ……悩んでいたのかい？ 優子ちゃんの」と

「……よく、わかつたな」

「……」

キツネは黙り込んだ。

「優子はさ、何か苦しんでるみたいなんだ」

「……」

「俺は、何とかしてやりたい」

「……何とか……？」

「ああ、俺が何とかしてやらなきゃいけないんだ」

その言葉は、キツネに向かってではなく、自分に言って聞かせるように。

諦めかけていた自分を、奮い立たせるために。

「……君に、何がわかるんだい？」

「えつ？」

「君は何も知らない。彼女の真意も、苦しみも」

口調も、声も、表情も、視線さえも。

キツネの物腰は、依然として柔らかいままだ。

にもかかわらず、その言葉は、非友好的なもの、敵意とさえ呼べるものを使っていた。

「……まるで、自分が何かを知つているかのような言い草だな」

「知つているよ。彼女が苦しんでいる理由も、なぜそうしなければならなかつたのかも……」

「そ、それって、何なんだ？」

「それを君に教えるつもりはないよ」

「なつ！？ ど、どうしてっ？」

「……」

だんまりを決め込むキツネに、腹が立ってきた。

「おこつ、答えるよ」

「……君は、彼女の気持ちを考えたことはあるかい？」

「……優子の、気持ち……？」

「彼女は優しい人間だ。とても、ね」

「……どういう意味だ？」

「そのままの意味さ。…………そして、それゆえに、苦しんでいるんだ

よ

「…………」

優子が優しい？

それゆえに苦しんでいる？

確かに、優子が優しいのはわかる。

素直じやないことはあっても、意地を張つてしまつといひはなつて
も、常に周りのことを気にかけている。

でも、それがなぜ苦しむことに繋がるのだろう。

「彼女が苦しんでいる理由を知れば、君はそれを解決しようとする。
そして……それが、さらに彼女を苦しめる結果となる」

「何で、それが優子を苦しめるんだよ？」

「お互いを大切に思うがゆえに、隠しておきたいことつていうのも、
あるんだよ。君が危険に晒されることになるのを、彼女は恐れてい
る」

「…………だから教えない、か」

優子は、俺に相談してこない。

俺を危険に晒す可能性があるから。

だから、一人で抱え込もうとしているんだ。

だけど、俺だってこのまま見て見ぬふりをしていろつもりはない。
優子に話を聞いてみよ。」

まずはそれからだ。

「…………いい顔をするじゃないか。何か決心したのかい？」

「ああ、やっぱり優子のことは俺が何とかしてやるんだ」

「そりゃ。それなら、僕ともまた会うことがあるかもしねないね。」

……じゃあまた

キツネはぐるりと踵を返し、夜道を歩いて行った。
携帯を取り出し、時間を確認する。

19：27

「よしつ」

この時間なら、優子は部屋にいるだろう。
俺は、全速力で家に帰った。

こんこんつ、こんこんつ

がらつ

「どうしたの？何か用事？」

窓を叩くと、すぐに優子が顔を出した。

「優子、何か悩んでるんだろ」

単刀直入に切り出すと、優子は驚いた顔をした。

「え……？あ、あの、アッキー、えと、どうして？べ、別に凶さで
なんか……」

「ああ、そつか。悩んでるんじやなくて、苦しんでるんだよな
」

優子が黙つて俯く。

それは、何よりも肯定の意味を持つていた。

「それを俺に言えないのは、危険な目に遭わせたくないから、だろ

？」

「…………うして」

「えつ？」

優子の声は震えて弱々しく、聞き取れなかつた。

「…………どうして…………そつか、思うの…………？」

「…………わつき、キツネに会つたんだ。そいつと話をした

「…………そつか」

優子は觀念したように顔を上げた。

「でも、何もしないで。アッキーを殺さなかつたのは、私の意志だ

から。だから……仕方ないの」「えつ！？」

今、何で言つたんだ？

俺を……殺さなかつた、つてどういふ意味だ？

「……どうしてそんなに驚いてるの？」

「やつや、お前……」

言いかけて、気付いた。

優子は、俺がキツネからすべて聞いたと想つてゐるんだ。

それなり、このまま白を切れば知りたいことはすべて聞きだせるだ

ろう。

だけど。

「……俺、キツネからまともど何も聞いてないんだ」

「えつ……」

「悪い」

「……」

「聞かせてくれないか？俺……今の優子を見てるの、辛いんだ」

「…………はあ……わかつた。話してあげる」

優子は諦めたように笑つた。

でも、その笑顔には、どこか嬉しそうな色が滲んでいる。

「ここで話すつてのもなんだから、少しお歩かない？」

「ああ、わかつた。……じゃあ下で、な

「ねえ、アツキー」

「ん？」

「さつや、あのまま適当に話合わせてれば全部聞けたんじゃない？
どうして、わざわざ……？」

「……優子を、騙したくなかったんだよ」

「騙す……？」

「優子を助ける立場の俺が優子を騙していや、優子が可哀相だから

な

そう。

優子を助けたいんだ。

優子に、心から信頼されて、『俺が何とかしてやる』って胸を張つて言いたい。

そのために、優子には隠し事をしないで、しっかりと向き合いたい。

「……ふうん」

「……別にいいだろ、何だって。それより、寒くない格好して来いよな。夜はまだ少し冷えるぞ」

「うん、ありがと」

そつ言つて、俺たちは一度別れた。

第六話 別れ

俺たちは、無言のまま歩いていた。

なんとなく、何かを話せる気分ではなかつた。さつき優子が口にした、『殺す』という単語。

『冗談ならともかく、本氣で言つ』となんて日常的にはまずあり得ない。

それはつまり、優子の身に起こつてることが、非日常的であることを意味する。

俺に、何かができるだらうか。

解決してやることができるのだらうか。

……いや、絶対してやるんだ。

どんなことがあっても。

俺は、優子のことを、愛しているから……

誰もいない公園は、静か過ぎるくらいだった。

二人並んで、ベンチに腰掛ける。

ザア——ツ

少し強めの風が吹き抜けていき、木々がざわめく。

その様子は、見る者に言い知れない恐怖を呼び起す。

「ちょうど、一年くらい前かなあ……」

優子が唐突に切り出す。

「私ね、あのキッネに会つたの。ふふつ……死神、なんだつて。信じられる?」

「……は?」

シーガミ?

何、それ?

「……シーガミって、あの死神か?」

「うん、たぶんその死神」

そして、優子は語り出した。

一年前の出来事を

「じゃあまたねー、アツキー」

そう言って、私はアツキーと別れた。

今日は久しぶりにアツキーを買い物に連れ回した。

買い物といつても、ウインドウショッピングだけで、しかも何も買つてないけど。

でも、いいんだ。

アツキーと一緒にいられるだけで楽しいんだもん。

「アツキー……」

不意に、胸が切なくなる。

会いたい。

さつき別れたらばっかりなのに、もう会いたくなつてる。

「……まったく、二づいんだから」

普通、こんなに積極的にアプローチしたら、気付きそうなものじゃない。

それとも、アツキーにひとつではただの幼なじみなのかな……

こうじうとき、『仲のいい幼なじみ』という関係は、足枷にしかならない。

「やつぱつ、ストレートに言つしかないのかな……」

好きです、つて。

.....。

「ひやあああああつ、無理無理無理つ、恥ずかしくて死ねるつ

「君が、HT-WA-Aキビロさんかい？」

「えつ？」

突然聞こえてきた、涼やかな声。
振り返るとそこにほんの

誰もいなかつた。

「あ……あれ？」

幻聴？

「幻聴などではないよ。僕はこゝだ。足元を『ひりとよ』

足元には、銀色のキツネ。

夕闇に浮かび上がるその姿は、幻想的を通り越して神々しくさえあつた。

……なんとなく、嫌な予感がした。

喋る銀色の不思議生物に目を付けられるなんて、ただ『じ』じゃない。

「……何か用なの？」

「エトウアキヒトさんなのかい？」

「……そうよ」

話が進みそうにないので、嘘を吐いておいた。

「……そつか……残念だけど、君には今日を限りにこの世を去つてもらうよ」

「……え？」

な、何言つて……

その途端、キツネの目が光を帯び始めた。

全身から力が抜けていく……

「あ、ちょ、ちょっと……何……？」

「すまないね。これも仕事なんだ」

意識が段々薄れしていく。

私、このまま……死ぬのかな……

ピーッ、ピーッ、ピーッ、……

聞きなれない電子音が聞こえてきた。

「あれ？ どうなつてるんだ？」

キツネの戸惑つたような声。

と同時に、ビデオの巻き戻しをするように意識が戻つてくる。

「……君は、エトウアキヒトさんじゃないね？」

首から下げるペンダントのようなものを見ていたキツネは、顔を上げ、私をじろりと睨んだ。

「……そんなの、名前聞けばわかるじゃない。なんで女の私が、男

の名前持つてるのよ」

「人間の名前なんて知らないよ。僕は仕事をしているだけだからね」
キツネは呆れたようにため息を吐いた。

「なぜ、エトウアキヒコさんのふりをしたんだい？」

「話が進みそうになかったからよ」

「君がエトウアキヒコさんじやないのなら、関係のないことだ。話を進める意味がないじゃないか」

その通りだった。

キツネの立場から見れば、全くもってその通り。
だけど……

「……嫌な、予感がしたのよ。現にアンタ、アツキーを殺そうとしてたんじゃない」

「ほう……」

キツネは興味深そうに目を見開いた。

「アツキー、か。君はずいぶんと彼女と親しいんだね」「彼女？……誰？」

「誰つて……エトウアキヒコさんに決まってるだろ？」「だから、それは男の名前だつて言つてるでしょ？」

「ああ、男の人なのか。……それで、君は彼と親しいんだね」「…………うん」

そういうえば、私は何でこのキツネと話をしているんだろう。

アツキーを殺そうとしてるヤツなんかほつとけばいいのに。

「……なるほど。やつき別れた彼、か」

「…………」

大した洞察力を持つているみたいだった。

「ま、待つて！お願いっ、彼を殺さないで……」

私はキツネにすがりついた。

目からは何かしょっぱいものが溢れてくる。

「そういうわけにはいかないよ。仕事だからね」

キツネは淡々と返す。

「お願い……お願いだから……アッキーが死ぬなんて……嫌だよ……」

「…………」

キツネはじつとじつと見ていた。

何もかも見透かすような、サファイア青玉の眸で。

「……なるほど。彼は君にとつて、とても大事な人なんだね」

その声は同情の色を含んでいた。

「だけど、僕にはそれを決める権限はない。……仕事だから、ね」

「仕事つて、一体なんなのよ……？人を殺す仕事なんて……」

「死神、だよ」

「え……？」

「死神。人間だけではなく、すべての生き物たちに、死を与える仕事だ」

「…………」

心の中がからつぽだつた。

死神とか何とか、そんなことはどうでもいいとして。

このキツネの仕事は、アッキーを殺すこと。

このキツネに、決定権がないこと。

この一つのことを考えると……アッキーが死ぬことは確定的だった。

「……君に、わずかばかり、時間を『えよう』

「……どういうこと？」

「君には、僕の部下として死神になつてもうつ。そつすれば、僕の仕事を手伝つてもらうことができるからね」

「……私に、アッキーを殺せつて言うの……？」

「そうだ。でも、その時期は……君が決めることができる」

意味がよくわからない。

「仕事をサボる死神もいるからね。ただ……サボればサボるほど、罰は重くなる」

「つまり……？」

「君に、彼を殺す仕事を任せゐる。それを遂行するか、サボるか……」

それは君次第だ

「あ……！」

私が『仕事』をサボれば、アツキーが死ななくて済む……！

「あ、ありがとう……」

「ただし、忘れちゃいけないよ」

キツネが釘を刺す。

「仕事をサボればサボるほど……彼を庇えば庇つほど、君自身の受ける罰は重いものになる」

「……わかりやすく言えば、私が罰を受ける代わりに、アツキーが生き延びられる、ってことね？」

「そういうことだ。それから……あまり長く延ばさないよう」。元々

年も延ばせば、確実に死刑だ

そんなの、怖くもなんともない。

アツキーがいなくなってしまうことに比べたら。

「死神の処刑は、『炮烙』^{ほうりゆく}といつ惨い方法だ。甘く考えないことだよ」

「……炮烙？」

「人間界でも昔使われたらしいね。猛火の上に、油をたっぷり塗つた銅製の丸太を渡して、その上を渡らせるんだ。みんな、火だるまになつて……思い出すだけで吐き気がするような方法さ」

「そんな……」

……聞くだけでも吐き気がする。

「早いうちにお別れを済ませて、殺すこと。いいね？」

「……うん」

頷いたはいいものの、どうすればいいかなんてまるでわからなかつた。

「……それから、一年が経つたわ」

そこまで一気に話した優子は、そこで言葉を切った。
俺には、まだ信じられなかつた。

優子が死神だということ。

俺を殺さなければいけなかつたこと。

そつしなかつた優子は……

……惨い方法で処刑される」と。

「……私はね、ずっとアツキーの」と、好きだった

優子の言葉はまるで……

「アツキーが私のそばからいなくなるのなんて、耐えられなことよ

最期の瞬間^{とき}を楽しむかのようで……

「これは、私のわがままなんだ」

ずっと健気に燃え続けていた、命の炎は……

「だから……ね、そんな顔しないで」

もひ、燃え尽きる寸前だつた。

「……ふ……やれる、な……」

精一杯の言葉は、嗚咽で震えていた。

「俺の、こと……本気で……好き、なら……わあ……」

震えを止めるよつこ、拳を握り締める。

「俺の隣からいなくなるなつ！俺のために命なんて懸けるなよつー……」

「アツキー」

優子がそつと手を握つた。

「アツキーのためだから、私、命だつて懸けられるんだよ。アツキーのこと、愛してるから」

優子の優しい掌の中での、爪が食い込むのも構わずに更に強く拳を握り締める。

「そんの……そんの、本当の愛じゃないだろ」

俺は、優子にそんなこと望んでいない。

ただ、隣にいてほしいだけなのに。

「そんなの、愛情の押し売りじゃないかつ！相手のことなんか全然考えてないじやないかつ！」

「アツキー……」

「相手が一番望んでないじやないか……それなのに、どうして

……「

「…………お迎えが、来たみたい…………」

春物の薄いコートの袖で乱暴に涙を拭い、顔を上げる。

そこには、キツネがいた。

「結局、『仕事』をしないまま『向こう側』へ行くんだね？」

「…………うん」

キツネの目が光を帯び、すぐ側に入り口のよつなものが生じる。そこから覗く『向こう側』は、草木は枯れ、空は淀み、大地は腐っている。

辺りには動物の死骸と思しきものが、喰い散らかされたように転がっている。

まさに、地獄、そのものだった。

「待てよっ、優子っ！」

こんなことつてあるか。

あんな世界に、優子を行かせてたまるか。

『向こう側』へ行こうとする優子の腕を掴む。

「行くな…………！」

万感の思いを込めて言つた。

なのに。

優子は、そつと俺の手に手を重ね、優しくそれを外す。

「私は、幸せだったよ。だって……大好きな人が、私の死に泣いてくれたから」

優子の手がそつと俺の涙を拭う。

溢れる涙は勢いを増して、ぽたぽたと地面に黒い斑点を作った。

「俺は……不幸だよ。だって、大好きな人が、自発的に俺の側からいなくなろうとしてるんだから」

優子は寂しそうに笑つた。

「…………さようなら」

優子が発したのは、別れの言葉。

いつもの、『じゃあね』とか、『またね』のように、また会うことに

を前提としたものとは違つ。

もう、二度と会わぬことを告げる、終幕の言葉。

「優子」

「アツキーなら大丈夫。すぐにいい女捕まえられて。私ほどの美女を引っ掛けたんだから」

いつもみたいな、「冗談混じりの口調。

でもその顔には、一筋の涙が光っていた。

「いつまでも私に操みさおを立てたりなんて、かつて悪いことしないでよね。必ず、誰かと幸せになること」

いつも通りの、ちょっとお姉さんぶつた言い方で。それなら、俺も、いつも通りに。

優子には、隠し事をしないで、本心を。

「……誰かと幸せになんて、絶対なつてやらないからなつー。」

「アツキー……」

「優子以外の人を好きになんて、絶対にならないからなつー。」

「アツキー……っ！」

優子は顔をくしゃくしゃにして、俺の胸に飛び込んだ。

「アツキー、私だって行きたくない……行きたくないよお……」

「優子……」

「私以外の人と幸せになんて、なつてほしくないよー。」

抱きしめた。

このまま一つになつてしまえるくらい。

強く、強く。

息苦しくなるけど、それさえも心地よい。

ぶわっと一陣の風が吹き、『向こう側』への入り口が閉じた。

「逃亡者をかくまつたら、僕も同罪かな？」

キツネが悪戯っぽく笑う。

「……いいのか？」

「君たちを見殺しにするような、非人道的なことはしたくないからね」

「あ、ありがとう」「

「なに、礼には及ばない。これは僕のわがままだから、ね」
そう言うキツネの目は、優しい色だった。

これで、優子が死ぬこともないんだ。

死神界からは、命を狙われることになるのかもしれないけど。
でも、大丈夫。

根拠はないけど、何とかなるような気がしていた。

「えへへ、アツキー！」

優子の安心しきった顔。

そんな優子を見ると、俺まで安心する。

安心したら、また涙が溢れてきた。

「わわっ、アツキー、どうしたの！？」

「な、なんでもない」

さっきの涙とは、180。意味が異なる涙。

嬉しかった、なんて、恥ずかしくて言えない。

「おやおやあ～、なんだか楽しそうですねえ～。俺も混ぜろよ」
幸せだった気持ちをぶち壊すような、下卑た声が聞こえた。

三人揃つて振り向く。

そこには、破れた汚らしい黒のローブに身を包んだ、人らしきものがいた。

右手には、大きな鎌を持っている。

すっぽりと頭を覆うフードの下は、暗いためによく見えないが、骸骨であろうと思えるほどに、その姿は死神のイメージ通りだった。

「あなたは……」

キツネが硬直する。

「知り合い、なのか？」

「僕の、上司です。……ヒトウアキヒコさんの死を決めた人、です

……」

嫌な動悸がしていた。

隣で震えている優子の手を握る。

「大丈夫、絶対何とかしてやる」
根拠はないけど、不思議とそう思えていた。

最終話 愛する人へ

「なんだなんだ～？お前、俺を裏切るうつてのかあ？」
キツネに向かつて、死神が言つ。

「……あなたは狂っています。人を殺し、幸せを奪うことで快樂を得る。それも、どんどんエスカレートして……薬物中毒（Narcotic Addiction）のように」

「だあつはつはつは、薬中つてか？そいつあ、もつともだ」
この上なく愉快そうだった。

人を殺し、幸せを奪うことで快樂を得る。

……そんなの、狂つてゐる。

「お前の好きにはさせない」

腹に力を込め、雰囲気に呑まれないようになつた。
自分を鼓舞するように。

隣で震える優子を安心させるように。

「だつたらどうするつてんだ？弱つちい人間」ときが
そう言つて、左手を軽く薙ぐ。

「があつ！？」

「アツキーフ！」

車に撥ねられたかと錯覚するような、強い衝撃。

口の中は血と泥の味が混じつていた。

「ぐつ……平氣だ」

すぐに立ち上がる。

膝ががくがくと笑つていたが、優子に心配はかけたくない。
と、優子が俺の腕を取り、自分の肩に回した。

「ほら、そんなに震えて……立つてゐのもやつとじやない
優子に肩を借りると、不思議と震えが治まつていく。

「……やっぱり、あなたは間違つています」

キツネが俺たちを庇うように前に立つ。

「なるほど、裏切ることだな」「上司を諫めるのも部下の務めです」

睨み合う二人。

街灯しかなく、暗い公園。

音といえば、風音だけ。

そんな静かな空間で、この一人の間だけは空気が違った。
ぴんと張り詰めた糸のように。

高まつた緊張は、ふつんと音を立てて決壊した。

「殺してやるッ！」

「止めますッ！」

二人が発した力の奔流が、正面からぶつかり合つ。

大きなエネルギーは虹色の光となり、暗かつた公園を様々な色に染め上げていく。

その強さは、直視できないほどだ。

「ぐう…………力が…………足りない…………っ…………」

キツネが呻く。

そのとき、光の向こうからこちらへ動く影を目が捉えた。

「秋彦君ッ！」

キツネもそれに気付いたようだった。

が、もう遅い。

死神は、右手に持つた大鎌を振り上げ……

「優子ッ！」

「きやつ」

優子を抱きしめるよにして庇う。

「アツキー！」

ひゅんつ

首の後ろ、わずか数ミリを、冷たい風が通り抜けた。
どさつ

気付くと、地面に倒れた優子に覆いかぶさるような格好だった。
どうやら、優子が引き倒して助けてくれたようだ。

どんづ

腹に響く、重低音の爆発が聞こえた。

「無事かいっ！？」

キツネが助けてくれたようで、振り返ると、死神は少し離れた位置にいた。

「優子、怪我ないか？」

「バカッ！」

「うわつ！？」

「……こんな近くで大声を出すなよ。

「何考えてんのよっ、この大バカッ！』一番望んでないことだ』つて言つたの、アツキーでしょっ

「あ、ああ、そうだったな。悪い」

「どうか。

優子はこんな気持ちだつたのか。

自分の命を犠牲にしてでも、相手を守りたいと思つ気持ち。でも、それはただの自己満足なんだ。

その行為が相手をどれほど傷つけるのかを、俺は一番よく知つていたはずなのに。

「勝手な真似しないでよっ」

「これで、おあいこだろ？……もうしないから」

「……ばか……」

立ち上がり、死神に向き直る。

「なんだ？一人仲良ぐ、あの世に行く覚悟ができたか？……もっとも、一緒に行つたとしてもあつちではバラバラになるだろ？がな」ぎやはは、と下品に笑つた。

「……もう、やめてください」

キツネの発したその声は、悲痛だつた。

「あなたはそんな人ではなかつたはずです。思い出してください。あなたの愛した人を。……今なお、愛している人を」

死神が笑うのをやめた。

「愛する人と幸せにできない辛さを、誰よりも知っているはずではないですか。それなのに……」

「黙れ」

死神は小さく震えていた。

「愛することの意味もわからん小僧が、何を偉そうに！」

「わかります！あなたの奥さんも、お子さんも、そんなこと、望んでいない……」

「黙れっ！俺は妻と娘のためなら何でもするつーこれがあいつらのためなんだつー！」

「……違うわ」

静かに、低い声で。

でも、力強く。

優子が、否定の言葉を発した。

「あなたのやつていることは、愛情の押し売りだわ」

そう。

最初は優子がやつて。

さつきは俺がやつて。

相手が最も望まないことを、『一番いい』と勘違いする。

どんな形かは知らないけど、そんなすれ違いを、この人もやつていたんだ……

「黙れっ」

「……あなたにも、大切な人がいるんだろう？」

言葉に、ありつたけの力を込めた。

「大切な人がいるなら、その人の気持ちを考えてあげるべきなんじやないか？」

『一番いい』を決め付けて押し付けるのではなくて。

相手のことを、わかつた気になるのではなくて。しっかりと対話し、向き合うことの大切なんだ。

「……だまれ……」

その言葉には、もうやつべきほどの勢いはなかつた。

「心なんて、目に見えないものだからさ、言葉にしないと伝わらないだろ」

「…………」

「相手の心を確かめもしないで相手のためになるだなんて、自己満足もいいところだ」

「…………自己満足、か

死神は、大きく息を吐いた。

「そう、だつたのかもしれんな。……会社を辞めたときから、俺は自棄になっていたのかもしれん」

「…………死神の世界にも、会社があるのか？」

「ははっ……俺は、元人間だ」

死神はフードを脱いだ。

その下に現れたのは、骸骨なんかではなく、少しくたびれた感じの、優しそうなおじさんの顔だつた。

ずっと苦しんでいたことを、吐き出したかつたのかもしれない。

ひどい会社でね。違法コピーは横行し、ライバル社へのスパイ行動ももはや常識。

力ネのためなら何でもする。

そんな会社が上手くいくはずもない。

経営が悪化すると、俺の部下の首を切ろうと言いくに出した。

有能なヤツでね。上の連中は立場が脅かされると思っていたのか、前々からよく思われてなかつたんだ。

いいヤツだったのに……経営の悪化は、バカな上のせいだというのに……アイツは、首になつた。

猛反対をしていた俺も、首にすると脅された。
もう、嫌だつた。

こんな腐った会社のために働きたくなんてない。

俺は、妻のことも、生まれて間もない娘のことも顧みず、会社のビルの屋上から飛び降りた。

死んでしまつてから、後悔したよ。

俺の軽率な行動が、妻と娘を不幸にしてしまった。

周りの幸せそうな家庭を見るたび、二人は辛そうだった。

ならば、俺が幸せな家庭をなくしてしまえばいい。

そうすれば、一人が辛い思いをしなくて済むから。

「ははは、今考えれば、なんてバカげた考え方だらうと思つけどね」

おじさんは寂しそうに笑つた。

「俺は、一度も過ちを犯してしまったな。どちらも、他人のことなどこれっぽっちも考えていない、ただの自己満足だ」

「おじさん……」

「こんなオヤジの戯言に付き合つてくれてありがとう。少し気が軽くなつたよ。……といって、俺の罪が軽くなるわけじゃないがね」

「おじさん……」

「さあ、お別れだ」

おじさんが『向こう側』への入り口を開く。

「しばらく、『こちら側』と『向こう側』は切り離すとしよう。死神は死神界に閉じ込める。……それじゃあ、元氣でな」

「あ、あの……」

キツネが言いにくそうに口を開いた。

「優子さんも死神です。だから……」

「あ……」

そうだった。

優子も、『向こう側』に閉じ込められるのか……？

「そ、そんな……」

「お、お願ひですっ、私、『いち』にいたい……」

「……好きにしなさい」

「えつ？」

おじさんはこちらに背中を向けたまま言つ。

「当然、死神は全員『向こう側』へ連れて行く。ただ、そうだね……」

人間と同じ姿をした死神一人をこの広い人間界から探し出すのは、さすがの俺でもちょっと難しいかな」

おじさんは振り返り、悪巧みをする少年のよつに笑つて見せた。

「そ、それつて……」

「ほり、行くぞ、キツネ」

「…………僕の名前は覚えて下さっていないのですね」

「二人、いや、一人と一匹が『向こう側』へ消える。

「ありがとう……ありがとう、おじさんっ！」

結局、名前も聞かないまま……

俺たちは、入り口が消滅してからも、しばらく眺めていた。

「あ……！アツキー、見てっ」

優子がはしゃいだように東の空を指差す。

いつの間にか白んでいた空に、太陽が今、まさに昇ろうとしていた。

「うわ、すっげ……」

優子と、初めて二人で見る日の出。

それは、俺たちのこれからを祝福してくれるかのよつ。

「……綺麗だね」

「……ああ」

神々しいまでの輝きで、俺たちの明日を照らし出してくれた。

「アツキー、大好きだよつ」

ちゅつ

唇に触れる、温かく、柔らかい感触。

「……えつ」

それはほんの一瞬の出来事で。

夢でも見ていたかのように、朧氣で。

「あははっ、アツキーと朝帰りだねつ」

きゅつと手が握られる。

「でも、夢じゃないんだ。

優子が急に真面目な顔をする。

「不束者ですが、よろしくお願ひします」

畏まつて頭を下げる。

「……こっちのセリフだ」

「ふつ、あははつ、何それ……」ちらりと、でしょー？」

「う、うるさいな、いいだる、何だつて」

「あははつ」

優子の笑顔は、作ったところのない、自然なもので。この笑顔が取り戻せて、本当によかつた。

そう思つた。

きゅつ

優子の手を、しっかりと握り返す。

「どうしたの？」

「いや…… よろしくな、改めて」

「ふふつ、じちらこそ」

優子の幸せそうな笑顔。
もう一度と、失わせない。

F·N·

最終話 愛する人へ（後書き）

Narcotic Addiction、いかがでしたか？意見、感想等いただと幸いです。著者としては、執筆途中でストーリーの核心部分を変更したため、活かせなかつた設定があつたのが残念です。次回作からは、「田中伊織」という名前に変更しようと思っています。次回作も是非読んでくださいませ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9852c/>

Narcotic Addiction

2010年10月23日13時54分発行